

歴史講座「二郷半領の徳本上人について2」

徳本上人をめぐる時代について

小林 將

はじめに

- ・徳本上人は、晩年（57歳）どうして江戸に招聘されたのでしょうか。
足掛け5年で生涯を閉じました（61歳）。
- ・帰京を止めたのが「一橋治済」「徳川家菩提寺・芝増上寺」でした。
それは、どうしてなのでしょう。

「登場人物」

- ・徳本上人 ・一橋治済（ひとつばしはるさだ） ・徳川家斉（11代将軍・息子）
- ・お美代の方（家斉側室） ・水野忠邦 ・徳川治宝（はるとみ・紀州公）

1、徳本上人のこと

<花押の意味>

「鬼殺す心は丸く田のなかに南無阿弥陀仏と浮かぶ月影」
「名号書（塔）」を識別する唯一の手がかり・サインであった。
(例) 渡辺崋山の誤認（文政8年〈1825〉）

<現世利益>

徳本上人の名号は、家内安全・安産・病氣平癒などとしてわたされた。

<現世利益の体現>

「慈徳院（治済の妻・将軍家斉の実母）の快癒」・・・資料①
「この御内証（内室）の御方は当公方様の御実母にましませしか
此御異例（病状）にて若（もし）御不幸も遊し候ハハ、
明年日光御宮二百回御神忌の御差支（さしつかえ）ともならせ玉へハ、
是非是非御全快在らせ給ふ様にと、御療治は申上るニ不及、
日本国中諸社諸山への御祈願仰（せ）出されハ、各々丹情（赤心）を抽て（引き出
す）けれども、更に験（きざし）しも見へ給わさりしに、
徳本行者の祈願にてかくの如く、早速に全快在らせられしハ、

行者の徳声は勿論、弥陀の本願念仏繫昌の基ひと成りにける。

此後ハ（一橋家は）月月幾度共なく行者を請し給ふて御念仏をそ信心し給ひるなり」

＜徳本上人の説法＞

「極楽へ行きたくば行者（徳本）について御座りませ。行者は極楽の飛脚だ。

臨終のときは阿弥陀様より先に、予が来迎する。

予が極楽の東門まで連れて行く。それから、東門の内は、彼の方まかせじゃ。

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申すのが、極楽の道を歩くのだ。

日課を受けた人は、どのようなことでも、この徳本が地獄へはやらぬ。

かげに形の添うごとく、われが守ってやる」

2、三郷の徳本上人

＜谷口村の講中＞

文化14年小石川一行院で、「講中名号書」（大幅）を下賜。

翌年文政元年徳本上人が亡くなった。その「名号書」で供養塔を造立。

「文化14年12月10日より帰府後、於一行院

一、大幅名号 講中百十人（110人） 武州二郷半領矢口村」（注1）

＜谷口村の念仏講の存在＞

八潮市下二丁目・浄土宗「西蓮寺」名号塔（南無阿弥陀仏）に在り。

慶応3年（1867）12月吉祥日

台座碑銘（正面） 念仏講中

（左面）「（二郷半領）道庭 彦江 花和田 谷口 酒井 境木 三九 戸ヶ崎 寄巻
鎌倉 幸房 谷中 市助 八丁堀」

（右面）「（八條領）八條 二丁目 川崎 古新田 垢村 大谷田 花又 浮塚 六木
大曾根 大原 小作田 青柳 金右エ門新田 六月」

＜講中110人（文政年間の戸数）＞

谷口42戸 花和田42戸 酒井27戸 境木16戸 計127戸

3、埼玉県の徳本上人

<六阿弥陀> 文政4年(1821)造立

札所	寺院	所在地	名号塔	宗派	徳本上人道歌	備考
名号石 壺番	川口 善光寺	川口市 船戸	なし	真言宗	●南無阿弥陀仏唱へてゐれハ 身にそふて殻のごとくに守る本尊	
名号石 式番	戸田 常福寺	戸田市 中町	在り	浄土宗	●若くとも無常の風か誘ひなハ 辞退したとてゆるしやせぬそよ	★戸田市 指定文化財
名号石 三番	中尾 吉祥寺	さいたま市 緑区中尾	在り 文政4年	★天台宗 「念仏講中」	●血気ても無常の小音する時ハ 臆病風か吹ひて来るそよ	
名号石 四番	大門 大興寺	さいたま市 緑区大門	在り 文政4年	★真言宗 「念仏講中」	●五十年夢のうき世と思ふへし ねても覚ても後世を忘るな	★さいたま市 指定文化財
名号石 五番	戸塚 三仏寺	川口市 戸塚	在り	浄土宗	●ただまうせよろづの罪ハ深くとも 南無阿弥陀仏にかつ罪そなき	
名号石 六番	青木 専称寺	川口市 上青木	在り 文政4年	★浄土宗 「念仏講中」	●阿弥陀仏といふて任する人ならハ をさめとるそよ光りの内に	
名号石 供養塔	赤山 源長寺	川口市 上赤山	なし	浄土宗	●南無阿弥陀仏生死輪廻の根を断ハ 身をも命も惜むべきかハ (辞世の句)	六阿弥陀の 供養塔

●文政2年(1819)：徳本上人『言葉の末』(ことばのすえ)刊行(江戸)

- ・文政元年(1818)10月6日 徳本上人示寂。
- ・文政2年(1819)正月15日「草稿」編集
- ・文政2年(1819)12月6日 『言葉の末』刊行

没後に出版された、徳本上人の信仰と教化を伝える歌集(道歌集)

巻頭歌「後の世の人の鏡にのこしをく言ハの末を知しきとぞ見よ」

徳本上人の道歌225首を、無常・地獄というような項目別に配列したもの

「題名」

壺番：「紀州公へ名号を奉りし時 書附られし」

式番：「無常の詠」無常の風 三番：「無常の詠」 四番：「無常の詠」

五番：「或人にしめされし」 六番：「光明撰取のこころを」

供養：「師命終前筆を取てしるされける」

●文政2年(1819)：『徳本上人詠歌諺註』(えいかげんちゅう)刊行(尾張)

- ・徳本上人が詠んだ歌(和歌や詠歌)に、解説を加えた和歌集・解説書。(諺：ことわざ)
名古屋で出版された。

「江戸書林」角丸屋甚助 「尾陽書林」永楽屋東四郎 美濃屋伊六 美濃屋市兵衛
美濃屋清七

●**文政3年(1820)：『徳本上人勸誡聞書』(かんかいもんしょ)刊行(尾張)**

・徳本上人が各地で布教(勸化・化益)の際、民衆に与えた教え(勸誡)説法を編纂した。名古屋で出版された。

「尾張書林」美濃屋清七 藤屋宗助 井澤和助 菱屋金兵衛

●**文政3年(1820)：『徳本上人行状和讃』刊行(江戸)**

・徳本上人の生涯を編年体で讃歌したもの。大基上人(弟子)著述。

伝通院御門前白壁町調進所雁谷七之助

4、徳川家斉の治世・・・50年間(歴代将軍最長)

(家斉15歳～65歳)・大御所時代(66～69歳)

・前期は、実父一橋治済の傀儡 ・55歳から一人立ち

<外交> ・ロシア、イギリスの来航

<政治・経済> ・寛政の改革

<宗教・信仰>

・在位50年間に1度も「日光東照宮」に行かなかった。(家康命日4月17日)

・「日蓮宗の台頭」。浄土宗の地位のゆらぎ(増上寺の危機感増大)

<習俗>

・大奥の日蓮宗「智泉院」(市川市)に頻繁な参詣・・・「智泉院事件」

・雑司ヶ谷に日蓮宗「感応寺」の建立・・・「雑司ヶ谷感応寺事件」

(お美代のおねだり)

<徳本上人とお美代の方の関わり合い> 文化10年～文政元年

5、紀州公徳川治宝(とくがわはるとみ)

・歴代の紀州藩主の中で、「名君」(注2)。

親子2代にわたる徳本上人の大信者。帰依・庇護を生涯にわたり行う。

・文化9年(1812)春、徳本上人を和歌山城内に招き、十念を授かる。

・文政7年(1824) 失政を幕府に咎められ、隠居させられた。将軍徳川家斉の息子を養子として送り込まれた。

<コメント>

・徳本上人の「最上級の信者は、徳川治宝であった」

・ライバル徳川家斉への鉄槌は、「天保11年、江戸一行院の本堂再建の執行」

6、50年体制への反動

- ・天保12年1月家斉歿
- ・首謀者：老中首座・水野忠邦（48歳） 寺社奉行・阿部正弘（23歳）

<体制>・家斉派の一扫・処分（クーデターの噂あり）

<政治・経済>・天保の改革

<宗教・信仰>

- ・日蓮宗「感応寺」の破却 ・「日啓」の処分（お美代の実父）
- ・「日光東照宮」に社参の復活。

<年譜>

- ・天保12年1月 家斉歿 ・天保12月4月 家斉寵臣3名の罷免
- ・天保12月10月 日蓮宗「感応寺」取り壊し
- ・天保12年10月 「日啓」・日尚（孫）別件捕縛（牢死）
- ・天保14年4月 「日光東照宮」社参復活

7、徳本上人招聘の背景・企図

- ・増上寺から「紀州公」への要請
- ・増上寺から招聘僧（鸞洲・大基）の派遣
- ・関東下向の理由 ・・・・資料②③④
- ・増上寺の企図（浄土宗の復権） ・・・・資料⑤

<コメント>

- ・浄土宗の復権。徳本上人足掛け5年では、失地回復はできなかった。
其の後、浄土宗の暗黒時代が続いた。
文化から天保年間のおよそ30年間、将軍家・大奥には「日蓮宗」が君臨・蔓延・跋扈していた。

おわりに

- ・きっかけは令和7年に一橋治済の再評価。それが、「徳本上人を取り巻く人々」にまで波及。
- ・「浄土宗と日蓮宗」との確執があった。
- ・「徳本上人信仰」は、バックに幕府がいた「官製の布教活動」。どのような「絵姿」を描いていたか。
(最大最強のパトロンは一橋治済。最大の信者は徳川治宝)。
- ・民衆は、「徳本上人名号塔」を建て、徳本上人の遺徳を伝えた。
(全国に「徳本上人名号塔」は約1,600基)

<資料>

・資料①「慈徳院（治済の妻・将軍家斉の実母）の快癒

その時（文化11年10月24日一橋御館招待時）に、妻女（将軍家斉の実母）が、病に伏せていました。いかに薬を処方されても快癒しなかったところ、徳本上人が十念を授けたところ、全快しました。それ以降、一橋家は絶対的な徳本上人の篤信者となったのでした。まさに「現世利益」を体現した事件でした。

（原文）「御異例にて、医薬験（ききめ）も見え給はざりければ、師を御枕べに請ぜうるたるに、師懇（ねんごろ）に鉦（かね）うちならし、念仏し給ひて退出せられたり。しばしがほどに、御ここ地、のごひたるように覚ゆとて、御起居もややおだやかにならせ給ひぬ。翌月（11月）の7日に。御床払せさせ給へり」

・資料②「東京都史跡案内板」平成24年3月東京都教育委員会

「東京都指定旧跡 徳本行者墓 文京区千石 一行院墓地内

江戸中期の浄土宗の僧です。紀州日高郡の人で、・・・

・・・やがて紀伊徳川家の招きに応じて紀州有田山に住みます。

文化11年（1814）増上寺典海大僧正の懇請により東国に行化し、

11代将軍家斉の厚い帰依を受け、江戸住民を教化するとともに小石川一行院に

住みます。文政元年（1818）10月6日、61歳で没しました。

平成24年3月 建設 東京都教育委員会 」

・資料③「中外日報」平成29年9月6日

希代の念仏行者「徳本」に学ぶ 浄土宗一行院住職八木千暁

「時の増上寺大僧正・教誉典海大和尚は、僧侶の懈怠、念仏の衰退を憂え、徳本を江戸に請待すべく紀州に使いを出す。大和尚は江戸に出向いた徳本に会い、『願わくは永くこの地に錫を留めて衆生を利益し給えかし』とその労を励ました」。

・資料④『小石川区史』（昭和10年・小石川区役所）

「一行院・・・後堂宇が荒廃してほとんど廃寺の状態になったが、

文化年中、名僧徳本上人が幕府の請によって関西より下向し、當院を浄土教宣布の道場となしてから大いに栄え・・・」

・資料⑤「大基上人略伝」（『浄土宗全集18』）（明治期作成）

「文化11年の頃、将軍文恭公（徳川家斉）日蓮宗を信じ、浄風（浄土宗）漸く（ようやく）振はす。縁山（増上寺）典海大僧正深く之を憂ひ、鸞洲上人に諮る。

上人答て曰く、

『徳本行者盛徳非凡、今紀州に在り。宜しく當地（江戸）に請して宗光（浄土宗の光）

の扇揚（宣揚）を図るへし』と」

- 鸞洲（らんしゅう）・・・徳本上人弟子「新纂浄土宗大辞典」

安永元年（1772）～天保14年（1843）4月19日。

熊野で徳本上人と出会って教を請い、以後、随従した。その後再び伝通院に帰る。

幕府の命を受けて北海道の有珠善光寺（伊達市）に住し、『一枚起請文』をアイヌ語に訳すなど、アイヌの人に向けて教化に努めた。

- 大基（だいき）・・・徳本上人弟子「新纂浄土宗大辞典」

天明5年（1785）～明治3年（1870）2月25日。

鸞洲から宗乗を学ぶ。蝦夷地善光寺の幹事を経た後に上京し、徳本行者に随従して伝通院に帰山した。天保3年（1832）尾張藩11代徳川斉温（なりはる）の請いにより尾張国建中寺27世となった。（尾張徳川家菩提寺。名古屋市東区）

<注記>

（注1）「大幅名号」（『解題・徳本行者全集全五巻書誌解説』）

「講中名号を附与するには、講員の名簿の提出が義務づけられた。大幅名号にしたいがため百人あるいは百十人の規模の講が多いことである。小幅が50人以下、中幅が百人以下、大幅がそれ以上と明確化されていた。講員数を整えることに講頭達は奔走したふしがよくわかる。信者にとって徳本の名号は、徳本自身であった。その結びつきが地方にしっかりとした念仏講を定着した」

（注2）「生きながら神様？『従一位』に叙された名君徳川治宝」

（和歌山県観光振興課）

歴代の紀州藩主のなかでもっとも輝き、多くの業績を残したという第10代紀州藩主・徳川治宝（はるとみ）。学問好きで知られた治宝は、紀州藩士の子弟の教育を義務化し、和歌山城下に学習館・医学館を、江戸赤坂紀州藩邸に明教館を、松坂城下に学問所を開設して文武の発展に努めました。本居宣長を招いての講義や、『紀伊続風土記』の新撰を命ずるなど、文化的事業を積極的に行いました。・・・（中略）・・・文政7年（1824）に藩主の座を譲って隠居し、西浜御殿を住居としましたが、その後も藩の権力を握り続けました。隠居政治期間を入れると64年もの長きにわたり権力の座に君臨しました。最終的に従一位にまで叙せられましたが、御三家の当主で従一位にまでになったのは、治宝のみです。

＜年表：徳本上人をめぐる人々＞

		政治・外交 ・経済	●一橋治済（父） ●徳川家斉（子）	●徳本上人 ●徳川治宝（紀州公）	●お美代の方（専行院） ●日啓
天明 7 年	1787	家斉 11 代将軍就任。寛政の改革（老中松平定信）	家斉（15 歳）		
寛政元年	1789		家斉（17 歳）	●紀州公徳川治宝（はるとみ）藩主となる（19 歳）。	
寛政 4 年	1792	ロシア「ラクスマン」が根村来航。通商を要求。			
寛政 12 年	1800			●前紀州公徳川重倫（しげのり）「願くは。国内いづれの山にても。心にまかせて勤られるべきよし」仰言あり。帰国。（上人 43 歳）	
		政治・外交・経済	●一橋治済（父） ●徳川家斉（子）	●徳本上人 ●徳川治宝（紀州公）	●お美代の方（専行院） ●日啓
文化元年	1804	ロシア「レザノフ」が長崎来航。再度通商を要求			◆お美代（出自）下総中山「日蓮宗」法華経寺子院智泉院「日啓」の娘
文化 3 年	1806		家斉（34 歳）		◆お美代（10 歳）大奥取次
文化 5 年	1808	イギリス「フェートン号」長崎に来航。			
文化 7 年	1810		家斉（38 歳）		◆お美代（14 歳）大奥御中臈（側室）に昇進
文化 9 年	1812		家斉（40 歳）	●紀州公徳川治宝（42 歳）の要請で和佐山	★中山法華経寺は将軍家祈祷所となる。「日啓」

				(和歌山市)に住する。(上人 55 歳)	は御祈禱御用取扱として、大奥に出入りする。
文化 10 年	1813		家斉 (41 歳)	●上人紀州に在り。	◆お美代 (17 歳) 溶姫誕生 (のち加賀藩前田家に嫁ぐ)
文化 11 年	1814		治済 (64 歳) 家斉 (42 歳)	●上人関東下向。 6 月到着 (57 歳) 10 月一橋御館 <u>お富の方快癒す</u>	
文化 12 年	1815	<u>4 月東照宮 200 神忌</u>	家斉 (43 歳)		◆お美代 (19 歳) 仲姫誕生
文化 13 年	1816			●徳川治宝 (46 歳) 権大納言に叙任。	
文化 14 年	1817		治済 (67 歳) 家斉 (45 歳)	●小石川一行院落成	◆お美代 (22 歳) 末姫誕生 (のち広島藩浅野家に嫁ぐ)
文政元年	1818		治済 (68 歳) 家斉 (46 歳)	●10 月上旬上人示寂 (61 歳)	
文政 2 年	1819			●『言葉の末』 『徳本上人詠歌診註』 2 冊刊行。	
文政 3 年	1820			●『徳本上人勸誠聞書』 『徳本上人行状和讃』 2 冊刊行。	
文政 4 年	1821			●足立郡内に「六阿弥陀」を造営する。	
		政治・外交・経済	●一橋治済 (父) ●徳川家斉 (子)	●徳本上人 ●徳川治宝 (紀州公)	●お美代の方 (専行院) ●日啓
文政 7 年	1824		家斉 (52 歳)	●紀州公德川治宝隠居す (54 歳) 養子斉順 (なりゆき・家斉七男) に譲る。	
文政 8 年	1825	幕府が「異国船内払令」を出す。			

文政 10 年	1827		<u>治済歿 (77 歳)</u> 家斉 (55 歳)		◆お美代 (31 歳) 浴姫前田家に輿入れ (本郷赤門の造営) ・「日啓」は守玄院住職 (智泉院は日量：子)
文政 11 年	1828	「シーボルト事件」が起きる。			
文政 12 年	1829		家斉 (57 歳)	● <u>徳川治宝 (59 歳)</u> 【徳本上人回向】 無量光寺 (和歌山市) を建立。徳本上人を開山とする。	
天保 3 年	1832			●大基 (弟子) 尾張公の要請で建中寺の住職となる。	
天保 4 年	1833	「天保の大飢饉」始まる。	家斉 (61 歳)		◆お美代 (37 歳) 末姫浅野家に輿入れ ・「日量」(お美代兄弟) は青山広島藩下屋敷観理院住職。
天保 5 年	1834		家斉 (62 歳)	●10 月 【徳本上人 17 回忌】 尾張建中寺で修し民衆 1 万 2000 人が参拝す。	◆お美代 (38 歳) ★「日蓮宗」感応寺の再興が決まる。 雑司ヶ谷鼠山 (目白) 二万坪が下賜される。地鎮祭「智泉院」(日尚：孫)
天保 7 年	1836		家斉 (64 歳)	●3 月 <u>徳川治宝 (66 歳)</u> 【徳本上人回向】 徳本上人誕生地の誕生院の公称を認める (日高町)。	◆お美代 (40 歳) ★ <u>感応寺落成</u> (造営費用はほぼ幕府持ち)
天保 8 年	1837	徳川家慶第 12 代将軍に就任 「大塩平八郎の乱」 「モリソン号事	家斉大御所 (65 歳)	●徳川治宝 (67 歳) <u>従一位に叙任。</u>	

		件」起きる			
天保 11 年	1840		家斉 68 歳	● <u>徳川治宝 (70 歳)</u> 【徳本上人回向】 江戸一行院の本堂再 建を命ずる。	◆お美代 (44 歳)
		政治・外交・経 済	●一橋治済 (父) ●徳川家斉 (子)	●徳本上人 ●徳川治宝 (紀州公)	●お美代の方 (専行院) ●日啓
天保 12 年	1841	天保の改革 老中首座水野忠 邦。寺社奉行阿 部正弘	1 月家斉歿 (69 歳)。	●治宝 (71 歳)	◆お美代 (45 歳) 10 月感応寺破却 10 月日啓の捕縛 (牢死)
天保 13 年	1842	1 月老中水野忠 邦日光へ赴く 2 月将軍家慶「日 光社参」を表明 8 月老中水野忠 邦日光へ赴く			
天保 14 年	1843	4 月「日光社参」 復活 (将軍最後の 社参になった)			
弘化 4 年	1847			●『言葉の末』再版。 (南都興福寺勸化所 蔵)	
嘉永 4 年	1851			●12 月徳川治宝 (81 歳) 【徳本上人 33 回忌】 治宝の命により誕生 院 (日高町) の本堂再 建。	
嘉永 5 年	1852			●12 月徳川治宝歿 (82 歳)	